

いんふいにとと・あか
でみい

郭堯

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISとマジシャンズ・アカデミーのクロスオーバーです。

ネタを思いついたら更新という形なので更新は未定です。ネタの提供があれば早く次ができるかもしれません。作者が扱いきれれば、ですが。

目次

そのいち、ちーちゃんと白騎士事件な んですけど	1
そのに、ニクミーとコア出力のことな んですけど	21
そのさん、セツシーと待機形態なん ですけど	39
そのよん、アザトインとシチュエー ション萌えのことなんですけど	51

そのいち、ちーちやんと白騎士事件なんですけど

魔法使い、神、悪魔。

ファンタジーとして、実在しないものとしてされてきた存在たちが世に現れ出てから十年余。

一般的な人間が持ち得ない特殊な技能、もしくは技術。それを持った人間、そして神魔と呼ばれる存在たちとの共存は概ね成功している。

魔法使いや神魔たちは一般社会の秩序を遵守する努力をし、段階的な交流を行い、一般社会に受け入れられつつある。

それでも火種は存在する。

個人の資質に強く左右される神秘の技術、魔法。殆どの人間が学ぶ事さえ出来ない技を持つて選民意識を持つている愚者たちの存在。

宗教に語られる神魔たちの姿を実際に目にし、それを認められない原理主義者たち。

神秘と現実の共存は、火種を抱えつつも、少しづつ形になっていた。

この異なる世界の融和と言っても過言ではない偉業、その中心となったのは魔術師たちが異空間に作り上げた学び舎、通称『学園』、マジシャンズ・アカデミーと云う。

そんな火種の中に一つ、学園と各国首脳、何れにとっても頭の痛い問題が存在した。こう、色んな意味で。

それは一柱の天使だった。彼は博愛主義者であり、平和主義者であり、世の誰よりも善意に溢れた存在である。

国と国が合い争えば、指導者たちの仲を取り持ち平和を齎した。

夫婦が喧嘩をすれば、怒りを収めさせる。

話だけを聞けば、彼ほど世の平和に貢献している者はいない。だが、多くの者は彼を恐れる。多くの者は彼に慄く。それは人間、魔法使い、殊神魔さえ。

その名をハプシエル。天子の階級に於いて能天使、すなわちパワーに位置する天使。人は彼を『福音を告げてしまう者（エヴァンゲリスト）』と呼ぶ。

重ねて繰り返す。彼は博愛主義者であり、平和主義者である。

そしてバイセクシャルであった。マゾヒストであり、あらゆる攻撃を快楽に転化する。

ボディビルダーの如き肉体美、角刈りの黒髪、パンダのタトゥー。口に出す事さえ

憚られるアレなファッション。善意の悪夢を撒き散らす汗と筋肉の化身。

「君に幸あれ」

ささやかな（本当にささやかな）幸運を齎す祝福の言葉と共に、彼の目に付く全ての者に送られる、暑苦しい抱擁とデープキス。全ては愛と平和の素晴らしさを広めるために。

だがその暑苦しくマツシブ、かつアレなファッションと言うコラボレーションが生み出す、侵食するような嫌悪と恐怖。それは精神の崩壊すら招きかねないものだった。

故に、多くの心弱き者は己の精神を守るため、彼と同じ趣味に走った。平たく言うとはハードゲイに。まあ、女性の場合、百合に走っても見た目悪くない。寧ろ筆者は好物です。

ちなみに某国と某武装勢力の指導者たちはハプシエルの『愛と誠意の籠った仲裁』により、今では仲睦ましく毎晩フンツ！ハツ！つてする関係になっている。

各国首脳は困っていた。戦争を仲裁する事自体は良い。一部国家の利益にとつては損失が出ているだろうが、『お前が戦争止めるところこっちが儲からないんだよ』とか言える訳もないのでまあ良いだろう。

問題は神魔関係者が各国の法律や国際法に縛られずに勝手をしていくという事で、各国首脳にとつては非常に面子が立たない、神魔に対して弱腰と見られることだった。

無論、ハプシエルの事は神魔、魔法使い側にとつても頭の痛いことだった。彼ら超常の理に生きる存在が現代社会に受け入れられるまで、容易ならぬ努力があつた。魔法使いたちには中世の魔女狩りが苦い記憶として残っているし、神魔も種族によつては畏怖と排斥の対象となつてきた歴史があるのだ。

つまり、一般社会と超常側はハプシエルに対する認識は完全に共通していたと言える。即ち「こいつ早く何とかしないと」と。

少女、織斑千冬が手にした、復讐の為の力。彼女の身に纏われる白い機械の鎧。狐の面を思わせるフェイスユニットの下で、少女は瞑目していた。親友、篠ノ之束の造つた魔導コア搭載型。パワードスーツ、インフィニット・ストラトス。それは白い騎士にも、九尾を携えた白狐にも見えた。

織斑千冬の家族は、弟の一夏一人だけ。血の繋がった両親は数年前に蒸発した。残された弟は心の傷から逃れるために記憶を封じた。女性の好意に異常に鈍感になるオマケ付きで。

切欠はただの夫婦喧嘩だった。お互いに二三の罵声を浴びせあい、次の日には元の鞘に戻っているような、そんな他愛ない喧嘩。にも拘らずヤツは現れた。愛と平和の精神を広め、喧嘩という不毛な行為を止める為。

その汗臭い抱擁と、どれだけやつても吸引力の変わらない唯一つのデュープキスによつて悲鳴を上げることすらできずに倒れていく両親。怯えて逃げる事もできない弟。そして何よりも、そんな家族を見捨てて逃げ出してしまった自分。自分に何ができたかは分からない。いや、何もできず、自分と言う被害者が増えただけだろう。理屈はそう。だが所詮は理屈、肉親を見捨てた理由にはならない。少なくとも千冬には。

「聞こえるか東、機体の状態は万全だな？」

少し硬い千冬の声、それは通信機を通じ、機体を造った親友に届けられる。篠ノ之東、最早天災的と評すべき頭脳を持った、千冬と同世代の友人である。

『もつちろんだよ、ちーちゃん。各グラフ全て適正値、東さんたちの仕事に間違いはないよ！』

通信から聞こえる親友の声が頼もしい。網膜に直接投影されている、半透明のグラフィックが幾つも映っていたが、千冬が理解できるのはまだ少数だけ。千冬がISの複雑な機構を理解するには、時間が足りなかった。

それでもその性能を疑いはしない。束に協力する魔法使いたちがいた。ハプシエルが邪魔なのは向こうも同じだった。どこか一本ネジが足りていないような、そんな残念な印象を与える美形の魔法使い。それに付き従う犬耳のメイド。超合金生命体や、美少年のような魔力人形。その何れも、魔法に詳しくない千冬にも分るほどの実力者だった。

「そうか。……やつが来るのは、まだなのか？」

『もうすぐだよ、ちーちゃん。絶対あいつを封印しようね』

対神魔用。パワードスーツ、『インフィニット・ストラトス』。後に『IS』と通称される兵器。その戦闘能力は如何なる現代兵器をも凌駕する性能を持つ、超科学技術の結晶である。わりと上位の神魔とも互角に渡り合い得るその性能も、開発者の束には不足

に感じられた。

神魔と渡り合えるだけでは足りないのだ。原則として死という概念を神魔は持たない。故に殺すことは不可能。ハプシエルの愛溢れる凶行を止めるには、彼を封印する他ない。だが如何に天災篠ノ之束でも、天使を科学的に封印する手立ては無く、何らかの魔法的アプローチを必要とした。

そう、この時点の IS にはハプシエルに『勝てるかも知れない戦闘力』はあつたが、『どうにか処理する』力は持つていなかった。そんな時、束の前に現れた魔法使い、佐久間栄太郎。彼は言った。

『科学で出来なきや魔法を使えばいいじゃない』

魔法が専門外だから科学でやってるんだ、と束にフライングクロスチョップされた。

この時から束と栄太郎の奇妙な共同研究が始まった。ついでに栄太郎の使い魔である犬耳メイドが二人の身の回りの世話をし、魔界から時折郵送されてくる妹を送り返していたりした。

そして栄太郎の伝により集う協力者たち。神魔と人類の諍いを防ぐ為に動き出した者。個人的な思惑でハプシエルを除かんとする者。

そして彼らは造りだした。ハプシエルに有効な魔法的封印を施す為に、大型魔力炉

並みの魔力生成量と、当時最高のスパコンなど軽く凌駕する演算能力を持ったコアユニツトを。

親友の弟であり、愛する妹の想い人、織斑一夏。その異常なまでの鈍感さ故に思いを遂げられない妹の姿。その姿に萌え……もとい心を痛め続けてきた東。その悲しみを怒りと変えて、彼女はハプシエル打倒を誓った。

そしてISは、科学の天災と、魔法の変態の英知の結晶として完成する。ちなみにコアの中身であるが、これは実は栄太郎がメカ少女オタクの神魔を口先で丸め込んで、半封印措置を施した物だったりする。

今ならメカっ娘のパートナーになれると。まあ、コアとの通信機能はないのでコミュニケーションは取れないが、一応嘘は言つてない。当然、相手はパートナーAIがジシオンを考えていただろうが。

そして運命の日、後に『白騎士事件』、『蕃薇感染警報の終焉』、『愛と平和が本来の意味を取り戻した日』と呼ばれる事件が起きた。

全身を白い装甲で包んだISの、カメラから送られてくる映像は、東たちの拠点にも届けられていた。篠ノ之家の地下に、東が勝手に造り、栄太郎たちによって更に手が

加えられている。科学的な面でも、魔術的な面でも、個人が持つには異常に高度なものばかりである。

この場にいるのは束を除き、達人級の魔術師としてその筋では『いろいろな意味で』有名な佐久間栄太郎がいる。更には金髪碧眼の美少年の姿をしたサイコパペットに意識を宿した、魔法工学の権威である寒河江教授。そして本業のカメラ関連の技能では活躍の機会はなかったが、魔法と科学技術の融合に於いて献身的に補助に回ったフランクラム・シユタイン教授。

何れも魔法使いが世に出るより以前、『学園』時代からの友人と言う間柄である。そして一番後ろにそつと控える、栄太郎の使い魔である犬耳メイド、エーネウス・バージェスト。

今、ハプシエルを目指し空を駆ける千冬。
ある意味世界最大の災厄に立ち向かう者達。

『センサーに感有りだ。間違いないな』

モニター越しに送られてくる通信。

「魔力波長は一致、間違いない。奴だ」

「ハイパーセンサーは物理的にも靈的にも完璧だよ。隠蔽術式も無しで隠れるのは不可能なのさ、ちーちゃん」

千冬の纏うISから送られてくる各種観測データを解析し、栄太郎と束は答える。

『……そうか。サポートは任せた、突貫する』

高额的な観測には至らずも、複合センサーであるハイパーセンサーの搜索範囲に存在する目標へとスラストを全開にする。

急速に動き出す視界。そしてGPS上にて日本海に出た所で、目標は視界に現れる。

ボデイビルのポーズを取りながら華麗に空を舞う、テカテカ光る色白な筋肉の塊。

『不思議だな。アレを目にすればもっと熱くなると思っていたのだがな』

「精神状態が悪い方向に向かないように、機能を作っている。真つ当な感性では、目から思考を侵されるからな」

応えたのはシユタイン教授。かつて二度に亘りハプシエルと戦った経験の元、軽度の脳内物質の制御と、魔法的な感情制御を持つて、心情に一定の抑制効果を齎している。近付く間合い。ISに気付く筋肉達磨。

『あつらくん？初めて見る子かしら。こんな所まで迎えに来てくれるなんて我輩、感激♡♡』

真にめでたい言葉を、カマつばい言葉を吐く。千冬はそれを無視して剣を構える。そして雄叫びと共に剣を突き出す。

『あつ、キクつうううう！』

防御力場を突き破り、剣はハプシエルに届く。上体を捻ってポージングしていたハプシエルの乳首に。衝撃によって吹っ飛んでいく筋肉天使。気色悪く甲高い恍惚の声

と共に。

本来彼に対する攻撃は、その全てのリアクションが精神攻撃となる。だが、ISの機能により千冬 of 精神は保護されている。

栄太郎たちの経験あつての対策だった。だが盲点があつたとすれば……

「「うおえええええ〜」」

アシスト陣にはそれが施されていない事だった。気色悪いマッチョ野郎の嬌声は一同の精神を蝕んだ。

『ど、どうした束、栄太郎さん？』

通信越しに響いた悲鳴は千冬にも届いた。僅かばかりの動揺が声に宿っている。

「な、なんでもないよ、ちーちゃん。東さんたちのことはいいから、あ、あいつを……」

『あん、もう、いきなり激しいアプローチ。我輩感じまくり♡』

「「おうふう!?!」」

吹き飛ばされながらもすぐさま復帰するハプシエル。相変わらず筋肉を強調するポーズを続けるハプシエル。ただそこで普通にしているだけで（ハプシエル基準）周囲に精神ダメージを撒き散らし続けるのだ。

精神を保護されている千冬もそれを察した。早く終わらせねばいけない。

『んも〜、綺麗な子ねえ。我輩堪んないわん』

頬を桃色に染めて、両手を広げて飛び掛る筋肉。それを高度を下げる事で回避する千冬。そしてすれ違い様に切り上げる。

『あうんっ、イイト！』

切り上げた剣は、ハプシエルの股間を打ち上げる。見るだけでも男を悶絶させる攻

撃も、彼ほどの変態にはイイ刺激のようだ。

千冬の攻撃を受ける度、ダメージと快楽を蓄積させていくハプシエル。そして人として大切なものを削られていくバックアップ陣（ちやつかり耳栓つけてるエーネウス除く）。

ハプシエルはISを纏った千冬を抱擁しようと迫り、千冬はそれをすり抜け、剣で斬りつけていく。

『んもう、焦らすのが上手ねえ』

画面の中のハプシエルが、アンニュイな表情を浮かべ、小指を唇に当てる。やる者が妥当なら破壊力のあるこのポーズも、ハプシエルが行えば違う意味で破壊力抜群だった。

そして次にハプシエルは大胸筋をピクピクと振動させながら、ピンクっぽい色のオーラと共に数を増やしていく。その様子は正に分身の術、と言うのは忍者に失礼だろうか？

『リアヴ・テンプレーション……』

発音だけ、色っぽさを乗せながら発せられる技の名乗り。分身したハプシエルは千冬を取り囲み、大胸筋を撃とした筋肉を振動させ続ける。

「ハーハツハツハツハ！ラアヴ・テンプテーション……は既に見切っているわ！当然対策済みゲブハっ！」

この『ラアヴ・テンプテーション……』という技は、筋肉の振動で音の共鳴現象を引き起こし、相手の三半規管を攻撃し動きを止める技である。

かつて栄太郎とシュタイン教授にとって二度目のハプシエルとの戦いの際、とある白虎とハーピーが無数のハプシエルの筋肉に揉みくちやにされるといふ惨劇があり、その対策は当然施されている。

ISの周囲に展開された防御力場が、操縦者に有害な影響を、機能が可能な限り排除する。筋肉のピクピクによる振動程度なら、その振動のみを選んで相殺することは造作もなかった。尤も勝ち誇っていた栄太郎は長時間ハプシエルの筋肉ピクピクを視界に納めてしまい、計り知れないダメージを被った。

千冬とハプシエルの戦いは続く。尤もハプシエルに害意はなく、攻撃されていると

いう認識もない。目の前の相手に愛と祝福のキッスを与え、打ち付けられる攻撃はそういうプレイ程度の認識である。受けてるダメージはそんな生易しいものではないのだが。

そんな理由もあり、戦いは変則的な鬼ごっこの様相になっていく。そして無数に増えたハプシエルの一体に掴まってしまふ。ISコアとなつていている神魔はハプシエルの接触そのものを攻撃と判断し、防衛力場の出力を上げる。防衛力場越しに抱擁し、唇を防衛力場に押し当てる。「君に幸あれ」の祝福の言葉と共に。

それは凄まじい光景だった。ISの防衛力場は出力を上げた結果、半透明のバリアとして視覚に映る。そしてそこにびったりと体を押し付け、少しずつ押し込んでくる。

モニターに送られるその映像により、アジトは阿鼻叫喚の地獄と化す。

想像して欲しい。汗に塗れた、男の中の漢と評すべき肉体美（しかも結構美白）を。そしてその肉体の上に化粧をした角刈りのカマ野郎（言動や表情を無視すれば造形そのものは事態は悪くない）の顔が乗っかっている。

そんな物体が目を細め、ムチューとする顔をガラスに押し付け、びったりと潰れていく。しかもそれが少しずつ近付いてくるのである。

しかもハイパーセンサーにより360度の視界を持つ千冬に限っては、より多くのハプシエルが迫ってきているのが見えた。

ISの感情制御を超えた恐怖が千冬を襲った。

千冬の手持っていた剣が変形し、ライフルとなる。そして放たれた光の奔流が、ハプシエルを弾き飛ばした。

この戦いは数時間に及び、ついにハプシエルの封印処置に成功した。本人は『また放置プレイなのねえええつ！』と悶えていたが。

兎に角これで戦いは一応の決着を見せた。束はこの結果を全世界に公表した。世界は歓喜した。束が何気に全世界同時電波ジャックをしたという事実がスルーされるほどに。

世界はまた一つ、融和へと向けて進んでいった。

ハプシエルが封印され、ISと云う存在は世界中の注目を浴びた。それまで魔法使いや神魔に対するカウンターは同じく魔法使いや神魔、もしくは彼らより齎されたアイテムを用いた人間に限られていた。

そこに初めて、純粋な科学兵器ではないとは言え、魔法使いでない人間でも（動力機関兼演算装置であるコアを除く）造れる魔法に対するカウンターが生まれたのである。

各国はISを求めた。一般社会との融和を善しとする魔法使いと神魔たちはこれを支持した。

そしてロボつ娘萌えの変た……もとい紳士の神魔が有志で集い、最初の一つも合わせてまずは二百個程のISコアが造られた。

やがて『魔法使い及び神魔による犯罪に対する制圧装備』としてのISの試験運用が決められる。

それと同時にISの構造と運用、更には対魔法使い、神魔戦闘の教育と研究を目的とした機関が設けられる。篠ノ之束を肇として魔法使いや神魔の協力の下、設立されたそれはIS学園と名付けられ、一般社会側と魔法側の新たな交流の場となる。

余談であるが、ISには一つ欠点があった。ISコアが有志で集まったロボつ娘萌え紳士な神魔であるため、一定水準以上の美少女でない力を貸そうとしない事だった。そのため、IS操縦者には高い資質や能力以外にも外見や萌え要素が重視され、I

S 本体も機能性に加えデザイン性が重要視されるようになる。

何せこの部分によってはカタログスベックが全く意味を失う事例も出た。プラスに働く事例もあればマイナスの場合も、である。

結果としてIS 操縦者たちの勇姿は多くの紳士たちを萌えさせ続ける事になり、高じて競技としてのIS 同士の戦闘の世界大会が開かれるに至る。

更に余談であるが、ハプシエルの抱擁からなる一連のアレにより精神を病み、自我を守る為にあっちの趣味に走る人間は少なくなかった。

それから操縦者を守る為にIS には精神に干渉する機能があるが、それは操縦者以外は守ってくれない。故にハプシエル戦ではバックアップ陣は多大な精神ダメージに晒された。

だが、この機能の盲点はもう一つあった。それはコアとなっている神魔の精神も守ってはくれないということである。

この時点では誰も予想できなかった。IS の生みの親、篠ノ之 東も、協力者である魔法使いたちにも。

まさか一番最初のコアが、『ノンケでも逝けるコア』になってしまった事に。そして

十年後に千冬の弟、織斑
に喜ばせることを。

まだ、誰も知らない。

一夏を巻き込んだラブコメ騒動を巻き起こし、栄太郎を大い

そのに、ニクミーとコア出力のことなんですけど

『白騎士事件』より十年近くが経った。インフィニット・ストラトス、通称ISは世界に広く周知され、既に車や飛行機に様に、知らぬ者のいない存在となった。

さりとてISの数は未だ四百に届かない。需要は幾らでもあるが、供給がすでに止まってしまって久しかった。それはISコアを造る際、協力してもらおう(材料になる、の方が正しい気がしないでもない)神魔の数に問題があった。

神魔とは即ち宇宙の法則そのものの化身であり、意思を持った現象に近い。彼らは宇宙の誕生と共に生まれ、宇宙の死と共に消える。彼らは『宇宙に生きる生物』ではなく、『独立して行動する、世界の一部』なのである。

そんな彼らは原則としてその数を減らすことはないが、増えることにしても同様のことが言える。詰まる所、志願者が途絶えればそれ以上ISコアの造りようがないのだ。

それでも神魔、魔法使いに真正面から対抗できる戦力が存在するというだけで、超常の者達と、通常の理に生きる者達にとってパワーバランスを維持する為に意味があ

る。ISとその関係者達はこの十年近くで、両者の共存に決して少なくない貢献をした。きた。

だが、そのISとて事と次第によっては新たな火種になる可能性を秘めている。

ISは、操縦者の技量やISコアとの相性、機体性能にもよるが、平均して中級神魔なら互角に戦える。一部、上級神魔とも渡り合えるのではないかと噂されるものすら存在するのだ。

更にISコアの製法。神魔を半封印措置を施し、それを機械で制御する、動力機関兼演算装置。神魔と一般社会の友好の為、その概要だけが公開されているが、製造に必要な技術は秘匿されている。

仮に、ではあるが。

今は秘匿されているISコアの製造方法が漏れ出したら。ISが超常の者に敵対的な者達の支配下に置かれれば。

ISコアを増産する為に神魔を襲う者が現れる可能性はないだろうか。

何せ今現在、世界最強の戦闘能力を持った兵器は、間違いなくISなのだ。今まで超常の者達が力では優位にあったが、今は互角に近づいた。双方の距離を縮めたが、今後新たな火種にもなり得る存在なのである。

そんな、世界情勢を左右する存在の一つとなったISだったが、

『そのI Sを盗まれるのじゃから、呆れてものも言えぬわ』

「その点に関しては同感だが、事件のうち半数以上に魔法か、それに類する力が関わった痕跡がある。一方的に彼らの失態だと責めることは出来ん」

公道を疾走する高級スポーツカー。円にして数千万は下らないその後部座席にて、男はケータイに向かって言葉を交わしていた。

「問題は事が国家の威信に関わるが故に、何処の国もI Sを奪われたことを隠蔽せざるを得ないことだ。お蔭でどれ程の被害が出ているか、把握できていない」

男の声は落ち着き払ったものだが、話の内容は非常に重大なものである。

『まあ、分からんのはそんな者達にも力を貸すコアが存在するということじゃな』

『致し方あるまい。『悪の女幹部』はタツ〇コ作品であるタイムボ〇ンシリーズでも

知られる伝統ある萌え属性。自我が中途半端なコアたちがその魅力に抗うのは難しいだろう」

『ふむ、ならば仕方あるまい』

「兎に角だ、状況の把握はIS委員会に出向している寒河江教授に任せる他あるまい。我々は、我々にできる方法で今の人間との関係維持に努めるべきだ。違うか、ガブヤン」

金糸の如く美しい長髪、絶世の美男子と形容すべき冷たい容貌、人間であることを否定する長く伸びた耳。そして『旗建御免』やら『罰怒縁努上等』などが刺繍された黒い特攻服。

男の名はアガリアレプト。ある意味残念な見た目だが、多くのグリモワールにその名を記され、どんな秘密をも解明してしまう力があるとされた悪魔である。

現在、魔界の外交員に近い立場となつて、一般社会との折衝に一役担っていた。

『そうじゃな、色々と面倒な役職がついてきてしまったとは言え、堂々と人の文明に

触れることができる世になったのじゃ。そうそう手放せぬしのう、アガリン」

そして電話の相手、彼がガブリンと呼んだ相手こそ、大天使ガブリエル。年寄りのような口調だが可愛らしいゴスロリ少女天使である。見た目はね。

『時にアガリン、中国に出張と聞いたが、何用じゃ?』

「なに、中国の新しい専用機持ちが決まったようだな。萌専門的助言を求められた。あとでシユタイン教授とも合流する予定だ」

諸事情により、何かしらのヲタクと化し易い神魔。この二人もそうだが、ISコアもロボっ娘萌えを基本としてソツチ系である。為に魔界に於ける萌えの第一人者である彼に、萌え文化に疎い国家から萌え専門知識的助言を求められる事がしばしあった。

『ほう、中国の専用機か。確か赤くて、モノアイで、腕が三本あるんじゃないか?』

「あれは確かに中国製だが、ISではないぞ、ガブヤン。」

怪獣映画は好い物である。でしょ？

鈴、本名凰 鈴音は I S を扱う才能に恵まれていた。小柄ではあるが運動神経に恵まれ、容姿も明るさと愛らしさを併せ持っている。

パワードスーツに近い構造の I S を扱うに重要な反射速度と敏捷性。そして自我が半端に封印されながらも萌え心を忘れぬ I S コアをやる気にさせる資質を、彼女は兼ね備えていたのである。

そんな彼女は中国の I S の世界大会である、モンド・グロツソの代表候補としてこの場にいた。分かりやすく言えば、スポーツのオリンピック強化指定選手が最も近いだろうか。

鈴が I S に触れてまだ一年程であるにも関わらず、そんな中にいると言えば、その非凡さが伝わるだろう。

そんな彼女は専用機として与えられた新型機、『甲龍』を纏い、強化キャンプに使われているガレージにいた。

紫を基調に黒をアクセントに入れ、球体的な曲線と刺々しい突起による独特のシルエット。特に両肩部位に浮遊する、竜の頭を思わせるアンロックユニットが特徴的であ

る。

第三世代とカテゴライズされる、中国武警隊に属する専用機でもある。

観測機器に囲まれ、機器から延びるコードは全て鈴が纏う甲龍に繋がれ、甲龍の情報を伝え続けている。

そんなガレージに入って来る一団があつた。中国側の関係者の案内で鈴に目を向けている金髪の二人。何れも整つた容貌の金髪男性。片方は黒い特攻服、片方は眼鏡と黒いコート。

魔界の外交官的な仕事をしている悪魔アガリアレプトと、魔法使いの最大派閥へ学園関係者フランクリン・シユタイン。『白騎士事件』に関わり名を知られ、鈴も資料やテレビを通して知っていた。

ISコアは中途半端に封印された神魔である。如何に彼らのやる気を煽るかで限界出力が決まるアレな代物だ。その為、操縦者の容姿も大真面目に重要事項なのである。

天然物の強気つ娘成分とツンデレ分を生まれ持った鈴は、そういう意味でも才能に恵まれたと言えるだろう。お蔭でただ甲龍を装着するだけで、出力限界値112%という数字を持っている。

だが、そんな彼女の魅力は充分引き出せているのか(萌え的な意味で)。彼女がもつ

と周りを魅了できる少女（萌え的な意味で）になればよりISの性能は向上するのだ。正直一番効果が高い上に、金銭的に安上がりでもある。

「彼女が、我々が萌え専門的助言を必要とする娘か」

冷淡な声に、思わず鈴は唾を呑んだ。視線を向けられただけで、周囲の空気が重くなつたように感じた。

意図的に力を抑えなければ、そこに存在するだけで周囲を聖域や地獄へと変貌させてしまうとされる上級神魔。その力を鈴は知識としてしか知らないが、納得できずしただけの迫力をアガリアレプトは持っていた。

一方、シユタインは言葉を発しない。眼鏡の反射光に隠れて表情は見えないが、自分に向けられている視線は真剣なものを感じた。その存在感は共に立っている上級神魔にも劣らない。

「シユタイン教授、どう見る？我としては……ふむ？」

シユタインはアガリアレプトに問いに答えず、真つ直ぐに鈴音に向かって歩いてい

く。レンズの奥から除く理知的で凜々しい碧眼。そこに戦場に向かう戦士のような気迫を宿した眼差しが覗く。

こちらも、鈴の思考を止めるに十分な迫力だった。呆けたように立っている彼女まで、手を伸ばせば顔に触れられる距離で立ち止まる。

ISを纏っている為、顔の位置の高い鈴を、シユタインは見上げる。暫く真剣に鈴の顔を見つめ続け、ふと顔つきを柔らかいものに変える。

まるで慈しむかのような視線と共に、彼は外套からあるものを取出した。

「君に、これを」

取り出した物は、黒毛の猫耳カチューシャだった。

「……へ？」

気の抜けた声を出す鈴。まあ、色々と印象深い登場の仕方にこれが続けば、訳が分からなくなるのも無理はない。

まあ、常人には理解し難いレベルの入れ込みだしね。

シユタインは、そつと鈴の頭に猫耳を乗せる。その瞬間、甲龍のデータをモニタリングしていた研究員達から驚きの声上がる。

「出力限界値、6%アップ!?!そんな、我々が試した時は反応などなかったというのに」

猫耳などといった陳腐と言つても過言でない属性は、真つ先に試された。その際はこのような出力向上はなかった。

「フツ、私のこれはただの猫耳などではない。脱着式半生体猫耳、名付けて！携帯型ミニガース（スペリオール）！」

まるで最初から鈴の体の一部だったかのように、不自然さの存在しない猫耳を指して、シユタインは叫んだ。

彼の作品、携帯型ミニガースはただの猫耳ではなく、装着者の容姿や性格に合わせて毛色や艶、細かい形状を変化させるといふ物である。更にはカチューシャ部分の迷彩効果、装着者の感情を読み取つての挙動など、まるで本当に獣耳が生えているかのよう

な効果を發揮するのである。しかも髪の毛の位置を調整したり、ウィッグ状に変化して本来の耳を自然に隠す芸の細かさである。

「それにしても、君程猫耳が似合う少女も珍しい。これは君に譲ろう」

さつきまでの無駄な迫力に続き、こんな簡単に機体性能を向上させられた事に、色々事態についていけない鈴。それでも礼を言っていないと気付き、感謝の言葉を口にする。

「えと、どうも、ありがとうにや……にや!？」

ごくごく自然に、あたかもそれが当然であるかのように鈴の口から出た、『にや』という語尾。困惑はそれを口にした鈴だけに留まらず、モニターを見ていた研究員もだった。その理由は違うものではあるが。

「出力限界値1221%まで向上、今までにない数値です!」

「フハーハツハツハツハー！この携帯型ミニガーSには装着した者に、極自然に猫っ娘口調に修正する機能を付加してあるのだ！これで何時如何なる時も、わざとらしいあざとさのない猫っ娘口調を話せるぞ！」

過去、彼は着けた者をツンデレさせるウサ耳カチューシャを創ったことがある。着けられた超能力者の、動作や表情にまで干渉したそれとをベースに、簡易化した代物である。

「いい、いらぬにや、そんな機能！」

羞恥心的な意味で耐えられない。

「風鈴音、それ、君の正式装備として採用するから」

仲間の筈のスタッフから告げられた言葉は残酷だった。日本での生活が長かった鈴は、趣味嗜好が一般的な同世代日本人女性と近い。故にそんなもの、恥ずかしい。だが同時にIS操縦者として、この猫耳アイテムの優秀性を否定できない。

鈴は色々な意味で優秀だった。萌え的な意味でも。多くのIS操縦者がISコアの出力限界値を上げる為に、ある者は女を磨き、また一部はあざとく萌える方向に走った。

無論、わざとらしきが出ればコアとして反応しない。作ったキャラで性能を上げるには、相応の演技力が求められる。故に素で魅力的な（萌え的な意味で）女性はそれだけで、強さに直結する才能なのである。

そして鈴は素で魅力的な少女であり、全てありのままの自分で操縦者をこなしてきた。だが、『キャラを作る』等の演技やらと無縁だったことが、語尾に『にゃ』をつけるといった行動に耐え得る精神力が育っていないのだ。必要なかった訳だから。

兎に角これは恥ずかし過ぎる。どうにかしてこの猫耳を着けなくてもいいように許可を得なくてはいけない。

だが、世界はそれほど優しくくない。

「ふむ、流石はシユタイン教授。猫耳は全ての獣耳の基本。故にこそ誤魔化しが効かず、身につける者の資質を如実に映し出す。そしてこれ程までに似合うとは」

アガリアレプトは頷きながら賞賛の言葉を口にする。事実、鈴の猫耳姿は非常に萌

える。もう猫耳装備がスタンダードでいいよ。

「その獣耳に敬意を表し、更なる極みに近づけよう。凰 鈴音、シールドバリアの出力を下げよ」

ISを対神魔、魔法使い用の装備とさせている重要な要素である、魔力式防御力場『シールドバリア』。物理的な衝撃に限らず、操縦者に直接的な害となる大抵の物事に反応し発現する膜状バリア。魔力による干渉から操縦者やISを守ることも可能である。

アガリアレプト程の神魔なら、『シールドバリア』を突破して操縦者に干渉することは可能ではある。だが、無益で骨が折れるだけの作業だ。故に、操縦者に意図して出力を下げてもらった方が楽だ。

猫耳の件に関して、まだ話を続けたい鈴だったが、仕方なく現場責任者である役員に顔を向ける。その役員が首を縦に振ったのを見て、鈴も『シールドバリア』の出力を下げるよう、意識する。

「凰鈴音、これがお前の萌えを最大限に発揮させる服装だ」

パチン、と。アガリアレプトの指が鳴る。そして鈴の纏うI Sスーツが形を変え
る。

それまでは密着タンクトップとスパッツを組み合わせた味気ないデザインだった。
それが上下が繋がり、健康的に露出していたへそを隠す。肩を露出し、裾を限りなく短
くしたチャイナドレス風に形を変える。

結果、甲龍のコア出力は130%に近い数字で安定した。国家代表と呼ばれる地位
にある操縦者たちが平均で135%前後の出力を維持していることを基準にすれば、世
界のトップ陣とも渡り合い得る数字である。無論、あくまで数字の上では、であるが。

数字の向上は総じて良いことである。だが、萌えに対して、充分な理解があるとは
言えない中国の関係者たちには理解できていなかった。小柄元気っ娘の萌えスタン
ダードたるへそ出しを放棄したのに、コアが萌えた理由が。

「ふむ、へそ出しが萌えの基本形の一つである事に異論はない。だが、素材によつて
は敢えて基本を踏み外した方が良い場合もある。へそ出しによつてそこに視線を集め
ることによつて、より魅力的な部位を隠してしまうこともあるのだ」

「で、では、その魅力とは……?」

落ち着き払った声に、研究員達が息を呑む。鈴音もまた、自身に向けられる言葉を緊張と共に待った。

「それは……」

「「それは……」」

「それは、WA☆KII★TII☆RA★、だ」

ワキチラ、すなわち脇がちらり。鈴音が纏うISスーツは袖がなくなっている。故に激しく動けばセクスイーな脇が汗の輝きを伴って衆目に晒されることになるだろう。その様子を想像し、萌えに疎い研究員達は同じ感想を抱く。

（（ありじゃね!?!））

研究員達は熱狂した。ISコアの出力値の数字に、そして自分たちの心の中に宿った確かな萌えに！

「WA☆KI★TI☆RA★! WA☆KI★TI☆RA★! WA☆KI★TI☆RA★! WA☆KI★TI☆RA★!」

沸き上るワキチラコール。アガリアレプトとシユタインは、萌えに目覚めた新たな同志たちを慈しみの視線で見つめていた。

そして歓声の中心にいる鈴音は、どんどん赤くなつていった。ちよつと涙目である。そりゃあ、年頃で真つ当な感性を持った少女が、脇等というマニアックな属性を付けられたら恥ずかしくもあるだろう。

この日から、彼女は世界中のヲタクから『脇をPrPrしたいIS操縦者NO. 1』という、登りたくもない道を登らされることとなった。

後日、紆余曲折ありIS学園で幼馴染である織斑一夏と再会した鈴音。更にちよつとあつてケンカに至り、クラス対抗戦で決着をつける運びとなつたのだが……

「さあ、一夏! ポコポコにしてやるから覚悟するにや!」

「……………ぶふゆっ、ぷはははー！ちよ、それは反則だつて、鈴。猫耳に語尾に、にやつて。おま、真剣勝負の前に、アツハツハツハ」

「わ、笑うにやー！」

締まらないのであつた。

そのさん、セツシーと待機形態なんですけど

セシリア・オルコットは後悔していた。

「やああって、しまいましたわあああ……」

I S学園の生徒寮の自室で頭を抱えていた。

セシリア・オルコットはイギリスの名門貴族に名を連ねる一門の現当主である。両親の不幸により早くに家を継ぐこととなったセシリアは、オルコット家の資産を狙う輩から、家を守り続けてきた。頼れる大人は周囲にはおらず、信用できる人間が幼馴染のメイドだけ。

そんな環境の中、交渉事に於いて相手のペースを崩す為にわざと相手が気分を害する物言いをするのが何回もあった。

結果、祖国イギリスではボツチに近い状態だったのである。

そしてI S学園入学を機にボツチ状態からの脱却を決意。学生デビューも最初が肝心とばかりに気合を入れた結果、所謂外交モードが表に来てしまい、英国淑女にあるまじき侮辱的発言をしてしまった。

そして言ってしまったことに内心で焦っている所に、世界で唯一男性にしてI S適正を持つ織斑 一夏のイギリス料理まずい発言に反応してしまい、いつの間にか決闘という話になっていた。

誰が悪いかと言えば、寸分の疑いもなくセシリアが悪い。それが分かっているからベットの上で身悶えしていた。決闘などと、口にしてしまった以上、自分から謝りに行くのも憚られた。自分はオルコット家当主、弱みを外に見せることはできなかった。

「も〜、どうすればいいんですの？どうすればグホっ!？」

いつも実家ではキングサイズのベットを使用していたセシリア。それと同じ感覚で左右にゴロゴロしていたセシリアは寮のベットの端っこから落っこち、英国淑女にあるまじき潰れたカエルのような声を出した。

地面に打ったアバラを抑えながら起き上ったセシリアはプルプル震えながらベットに戻る。

「くっ、兎に角、どうにかうまく謝りませんと」

このままにしておく、オルコット家の家名に傷が付く。それも自分の行為によつて、だ。それだけは避けねばいけない。

ベットの上に座り、両手を握つて気合を入れるセシリア。尊敬する母親の残したものを守る為にも。

そんなセシリアに近づいてくる、小さな影。高さ四十センチ超の、セシリアを二頭身にしたかのような物体だった。

「ああ、この異国の地で、貴女だけが私の癒しですわ。私の可愛い『ブルー・ティアーズ』」

『ブルー・ティアーズ』。蒼い雫という名を持つ、セシリアの専用機の、つまりISの待機形態と呼ばれる姿である。

人間が装着すれば三メートルを超えることもあるIS。戦闘が想定される魔法使い等に対し、輸送や装着時間等の即応性の問題が指摘されていた（一応戦闘機等よりは

優れてはいるが)。

それに対する一つの答えが、ISの待機形態と呼ばれる半擬人化形態である。

魔法用語に『疑似精霊』と呼ばれるものが存在する。

一定量以上の魔力を長期間浴び続けることにより、無機物が疑似的な人格や身体を手に入れることがある。この現象を指して『疑似精霊化』とされ、結果生まれた存在が『疑似精霊』である。

その中でもそのアイテムの特徴を残しつつ、可愛らしい女の子の姿をした疑似精霊は『萌え精霊』としてその手の輩からは絶対な人気を誇るのである。

そしてISの待機形態とは、佐久間栄太郎謹製の人工精霊『プチネウス』のデータをベースに、専任装着者のパーソナルデータを合成。その合成データをパーソナリティとして、ISコアの生成する魔力によってISを意図的に疑似精霊化させるのである。

疑似精霊化したISはコアとなった神魔の性格とは別に、装着者に似た二頭身の体と独自の人格が与えられるのである。プチキヤラ好きには堪らないね♡と言うわけで『ブルー・ティアーズ』の待機形態は、メイド服を着たプチセシリアとなっている。

んしょ、んしょ、とベットによじ登り、『ブルー・ティアーズ』は爪先立ちになってセシリアの頭に手を伸ばす。頭を撫でて慰めようというのを見て取れる。身長と手の長さが足りず、プルプルするだけに留まってしまっているが。

「るー、るー」

「……もう！可愛らしいですわ！私のブルー・ティアーズ！」

力いっぱい背を伸ばす『ブルー・ティアーズ』を抱きしめ、感極まったセシリアはまたしてもベットの上がゴロゴロと。そして再びセシリアの体はベットの端を超えていく。それも今回はより勢いが付き、この場にはないルームメイトのベットに背中をぶつけた。

「グホッ!？」

再びセシリアの口から出てくる淑女にあるまじき声。ぶつけた背中を抑えてよろよろと立ちあがろうとする彼女を、『ブルー・ティアーズ』は心配そうに見つめる。

「るー?」

「フフ……、し、心配は無用ですわ。明日はちゃんと織斑一夏に非礼をお詫びして、改めて決闘に挑みますわ」

「るっ！」

アバラと背中、短時間で打った場所の痛みを堪えつつ、立ち上がったセシリアは胸を張る。AIとは言え、幼子のような『ブルー・ティアーズ』に心配をかけまいと、すぐに心配事を解決すると伝えた。もつとも、『ブルー・ティアーズ』は純粹にセシリアの怪我の心配をしているわけであるが。

そして翌日。

「また、やああってしまいましたわあああ！むしろ何故挑発してしまっただんですの!?」

セシリアは再び自室のベッドの上で身悶えていた。両手で羞恥に熱くなる顔を隠しながら、例の如くゴロゴロと。そして、

「ゴツホ!？」

例の如く落つこち、ある意味芸術的かも知れない呻き声をあげた。

自分の言動に頭痛を覚えていたセシリアは、しかし背中の痛みにより、嬉しくない形でそれを柔らる結果となった。

「るー、るー」

「だ、大丈夫ですわ。今度チエルシーに実家のベットと同じ物を注文させませんと」

背中を擦りながらベットに戻るセシリア。この場にはいないルームメイトの受難は、この瞬間決定された。

それは兎も角、このままでは埒が開かない。

周囲に人がいると素直に謝れず、結果として挑発になつてしまうセシリア。放課後に呼び出そうにも、決闘の為の特訓をしているらしく見つからない。このままではグダグダと時間だけが過ぎて行ってしまうと彼女は考えた。

「仕方ありませんわ。今日お部屋を訪ねてみましょう」

幸いなことに、織斑一夏の部屋はクラス中に知られている。『ブルー・ティアーズ』に留守番を任せ、一夏の部屋へ向かおうとした。だが、そんなセシリアの行く手を遮る者達がいいた。

それは蒼い髪の、見覚えのない眼鏡少女。さして、彼女と対峙する着ぐるみっぽいパジャマを着たのほほんと緩んだ顔つきの少女。

蒼い髪の少女に覚えはなかったが、着ぐるみパジャマの少女は、のほほんさんと仇名されているクラスメイトだった。

「……………お願い、本音。そこをどいて」

「駄目だよ、あの人に会わせちゃいけないって、会長の命令なんだよ」

「……………永年探し求めた『劇場版アニレオン！ 光臨！進撃の美幼女神』の初回限定DVD。それを佐久間先生は同人誌のアシスタントで譲ってくれて。それがどれだけ得難いチャンスなのか、本音、分かって！」

「それタイトルの時点で色々と駄目な気しかしいよ〜！」

対峙する二人の会話に、IS操縦者としての知識で『萌え』関連の話題だとセシリアは判断した。だが実力と容姿に恵まれたセシリアはその手の小細工じみた手段を好まず、詳しく知っているわけではないのだ。なので空気を無視するようであれだが、二人に退いてもらうために声をかけようとし、

「……本音が分かってくれないなら、無理矢理にでも……罷り通る！」

「これもかんちゃんの為なんだよ〜！」

蒼髪少女が本音を避けようとし、本音はそれを遮る。眼鏡少女逆方向に避ける、着ぐるみ少女それを遮る。俎板少女避ける、巨乳少女遮る。ちっばい揺れない、デカパイ揺れる。

その動きはやがてスピードを上げ、対面高速反復横跳びとなる。

「あ、あの……その貴女方、ちよつと、そこを退いて……」

何とか声をかけようとするセシリアだが、目の前の二人は対面高速反復横跳びにのめり込んで、セシリアに気付いてすらいない。

何とか気付いてもらおうと右往左往していると、反復横跳びする二人の頭に正確に拳骨が落とされ、二人が動きを止める。

「もうすぐ消灯時間だ、珍妙な奇行はそこまでだ」

拳の主は織斑 千冬、ISに於いて世界最強と呼ばれる寮長の登場を持って、セシリアの冒険は幕を閉じた。

そして結局謝罪の言葉を出せたのは決闘の後、織斑一夏のクラス代表就任を祝うパーティーでのことだった。

結果として試合に勝ったのは大方の予想通りセシリアだったが、その内容は一夏の予想外の大健闘があった。思う所があったセシリアは自ら代表を辞退し、結果一夏がクラス代表となったのである。

その際初めて皆に披露された『ブルー・ティアーズ』の待機形態。普段のメイド服ではなく、ISを纏ったプチセシリアの姿。流体形で構築された優美なシルエツト、妖

精の羽を連想させるクリアパーツを持つアンロックユニット。SFとファンタジーが美しく調和したそれを可愛らしくデフォルトした姿は多くの生徒にもみくちやにされてセシリアの視界から消えてしまっていた。

ちなみに一夏の専用機、『白式』は何故かデフォルトされた姉の姿で具現した。「ぴやつ、ぴやつ」と鳴くこの『萌え白式』は具現化してすぐさまクラス的女子たちに奪われて祭りが始まってしまった。

可愛い物を目の当たりにした大量の女子の前では、男など無力なものなのであった。『WAっしよい』してる女子たちを見て、一夏は思ったそうな。

余談であるが、色々あって一夏の周囲に専用機持ちが増えるにつれ、彼の幼馴染である篠ノ之箒はある思いを抱くようになる。

『私も可愛いのが欲しい』という、乙女チックなものを。

これより大分後のことであるが、箒は色々とわだかまりのある姉にこのことを相談してしまふ。結果、束は愛する妹との関係改善と身内鼻唄の為、専用機を送られることになる。専用機を勝ち取るために努力している他の生徒たちに申し訳ない気持ちもあつたが、それ以上に可愛いのが自分の所にも来たという喜びが勝っていた。

そして発現した待機形態の姿は……

「モツピー知って（A A 略）……」

「何故だああああああ！」

箒、orzる。且つわだかまり深まる。

「うわーん！何でこうなるの〜〜!?!」

姉、同じくorzる。

そのよん、アザトインとシチュエーション萌えのこ
となんですけど

シャルル・デュノア。本名をシャルロット・デュノア。

フランスのIS代表候補生であり、性別を偽り、二人目の男性操縦者としてIS学園に入学してきた。彼女はフランスのIS企業、デュノア社の社長の娘であり、その父の命令で来たのだ。

目的は世界唯一の男性IS操縦者である織斑一夏に近づき、その機体データなどを盗み出すという、産業スパイのようなものである。

シャルロットが自身の父親と初めて顔を合わせて、まだそれほど長い時間は経っていない。生母の庇護を失い、父親の元に赴くことになったが、そこは安住の地には程遠かった。

偶々ISに高い適性があったからこそ、テストパイロットという立場を得ることができたが、親の愛情は注がれることはなかった。ただただ、便利な道具だった。

そのデュノア社が第三世代ISの開発に遅れをとっている現状、フランス政府に

とって面白い状況ではない。

今やISは治安維持と超常側と一般側のパワーバランスの維持に不可欠なものになっていく。そのISの性能が他国のものに大きく引き離されるとなれば、国民から治安に不安の声が出る可能性がある。超常側に治安維持を多く委託せざるを得ず、彼らに過度に政治的な力を与えることにはならないか、と。

十数年かけた超常側と一般社会の融和政策も、互いの不信感や持たざる者の不安を払拭するには短すぎるのだ。

そんな事情もあり、フランス政府はデユノア社のIS開発許可を取り消す可能性を示唆した。

IS産業はその政治的重要性と比べ、信じられないほど利益が少ない。それは開発及び製造コストの高さに対し、ISCコアの数の上限により絶対数が余りにも少ないという事情があった。そのため、多くのIS関連企業は国家の各種支援を受けねば事業が回らないものがほとんどなのだ。

そんな中での男性IS操縦者の登場。もしその秘密を手に入れ、男でも操縦できるISが造れば、或いは新型ISを上回る利益を生み出せるかも知れない。

だから、シャルロットをシャルル・デユノアという男性操縦者に仕立て上げ、織斑一夏に近づけさせたのである。

「そんなのって、ありかよ。実の親が、自分の子供にこんな……」

シャルルの、いや、シャルロット・デュノアの告白に、一夏は歯噛みした。一夏には両親の記憶がない。理由は触れたくないので、敢えて触れないが。それでも、こんなのが普通の親である筈がないと、怒りを覚えた。

「一夏は優しいんだね。知り合ったばかりのボクの為に怒ってくれるなんて」

シャルロットは、知り合って間もない彼女の為に感情を昂ぶらせている一夏に、悲しみと諦観の混じった微笑を浮かべて、そう口にした。

「シャルはいいのかよ！自分のことなんだぞ！どうしてそんな笑っていられるんだ！？」

一夏はストレートに感情を表に出してしまう人間である。シャルロットにはそんな一夏の様子が好ましく見えた。だから次の言葉が彼からどんな感情を引き出すのか、

少しわくわくしながら告げた。

「いいんだよ。だってそういう設定ってだけでもん」

「いくら設定だからって……うん？設定？」

さつきまでと違い、ニコニコと笑顔を崩さずそう言い切ったシャルロットに一夏の目が点になった。

「うん、本当の所、お父さんにも、お義母さんにも、良くしてもらってるよ」

「え、じゃあ、今の設定云々の話は学校には……」

「勿論話は通してあるよ。いくら経営が悪化してきてるからって、こんな穴だらけな計画に社運を預けるわけないよ。日本の学園ラブコメじゃないんだから。一夏もノリがいいよね、本当に騙されてるみたいなりアクションだったよ」

アハハ、と無邪気に笑うシャルロット。一夏は目を反らした。

「クラスの皆も、E U圏の人は知ってると思うよ？ドラマにもなってるし」

「ドラマ!?!」

「うん、さつき言った内容で。流石にボクの役、他の役者さんだけど。今度日本でも放映される予定だから、良かったら見てよ」

設定、ドラマ、最早一夏は事態についていけなかった。余りにも衝撃が連荘しまくったせいで、軽いパニック状態である。

「……お、おう」

引き攣った笑顔で、ただただ反応を返すだけで精一杯だった。

「あー、えと、なんでそんなことを?」

さつきまでの悲しみの表情も、演技だったということだろう。それはまだいいとして、態々そんな労力を割いて、変な設定を付与するというバカげた事に、一夏はその理由が理解できなかつた。

「一夏もISでコアからエネルギーを引つ張りだす為に萌えが重要なのは分かるよね」

シャルロットの確認に、一夏は頷いた。萌え要素なるものを理解できているとは言い難いが、それがISで重要な要素であることは理解している。ついでに言えば一夏は自分にそんなものがあるとは思いたくなかつた。

先ほどまで空気を読んでか、部屋の隅で大人しくしていた待機状態のラファールを抱きかかえながら、シャルロットは説明を続ける。

「で、ファッションや語尾みたいな分かり易い萌え要素が今の主流なんだ」

ISの登場から約十年。コアの出力向上の手っ取り早い方法として様々な萌え要

素が投入されてきた。それは多くの関係者達によって研究されてきた。そして『妹』や『メイド』などといった本人に付随するもの、『ケモ耳』のような一般人にはフアツション的な方法で取得するもの、そういった『属性』に重きが置かれている中、語尾という最も簡単そうな要素は敬遠されていた。

それはその語尾を使う操縦者が、それを口にする際照れが混じるなどの不自然さがある、コアが反って萎えて出力が下がってしまうのだ。

尚、中国代表候補、凰 鈴音の場合、それがツンっぽく見えて逆にいい感じになっているが。

さて置き、語尾などと同様に多くのIS操縦者たちから敬遠されている出力向上法、それがシチュエーション萌えである。

シチュエーション萌えが敬遠される問題は、語尾等と同様のリスクを負いながら、その萌えが本人の萌え要素ではないため、ブーストも一時的なものであることだ。だが、他の出力向上法と比べ向上の振幅は寧ろ広かったりする。何故なら本人の萌え要素に頼らないからこそ、コアに新鮮な萌えを提供できるのだ。

故にデユノア社は他のどの企業も、国家も試したことのない奇策に出た。第三世代機の完成に後れを取り、他の専用機持ちに対し性能で優位に立てないことを前提に、出力で差を縮める方法を。

常に新鮮なシチュエーション萌えを提供できるように、いつそドラマやっちゃうんだZ E ☆

そして繰り返される萌えシチュエーションによるブーストを途切れさせないという荒業を実現したのである。

もうぶつちやけ役者でも食っていけるレベルまで、シャルロットの演技レベルに向上している。

「という訳で偶に撮影でいなくなるけど、よろしくね、一夏」

屈託のない笑顔を浮かべるシャルロットに、さつきまでの勘違いの気恥ずかしさから、苦笑いを浮かべながら一夏は返事を返した。そんな一夏の心情など知らぬとばかりにラファールは同じく待機状態の白式とじやれあっていた。

尚、通常専用機の待機形態は操縦者をデフォルトしたような姿になる筈なのだが、白式は何故か小さい千冬であった。結果多くの千冬ファンが御菓子で釣って誘拐を試みたりしているとかいけないか。

「でもシャルはさ、撮影とIS操縦者同時にやって大変じゃないのか？」

一夏にとっては純粹に興味だった。テレビとかでしか見れない芸能人に直接会ったような気分が、彼にはあった。

「大變つて言えば大變だけど……僕の場合これもＩＳ関係みたいなものだから」

確かに大變ではあった。だが、多くのＩＳ操縦者が己の萌え要素を磨くのと、その本質は変わらない。第三代に分類される専用機が実用段階に至りつつある現状、如何に名機とは言え第二代であるラファール・リヴァイブのカスタム機である自身の専用機。基本性能の差は如何ともしがたい。

それを補うためのシチュエーション萌えブーストである。ジャパニーズコミックや、ライトノベルを参考にドラマなんて手の込んだ方法をとったのは。これは他のＩＳ操縦者たち以上に多くの時間拘束され、勉強や訓練の時間も確保するとなると、必然的により長くプライベートを犠牲にすることになる。

他の代表候補生と同じだけの結果を得るのに、より多くの努力が必要となるのだ。

「それでも、僕にも目標があるから」

そう応えたシャルロットの笑顔は一夏には眩く見えた。決して望んでIS学園に来た訳ではない彼には明確な目標など持ちようもない。今の彼女の輝きは、今の自分では持ちようのない物だと理解できてしまったのだ。

魔法とは技術である。生まれ持つての適性がなければ習得できないが、それは魔法に限ったことではない。適性がなければなれない職業は一般社会にも少なくない。航空機のパイロットなどがそうである。ただ、魔法ほど顕著ではないだけのことだ。

一方で神魔の発揮する超常の力は魔法ではない。神魔は力は彼らの機能である。魚が水の中で呼吸ができるのが当然であるように、鳥が空を飛べるのが当然であるように。神魔の能力は生まれ持ったものであり、それが変化することも、新しく増えることもない。生物の後天的に手足が増えたりしないのと同じように。だからこそ、人が神魔に追いつがる為に生み出された魔法という技術を、態々学ぶ神魔もいるのだ。

魔法使いの技巧たる魔法、神魔の器官たる能力。これらはそれを振う者たちが一般社会に出てくるようになってからその存在を実在するものだとして認識されるようになった。

だがそれより以前から、一般社会全体とは言えないが、存在を知られていた超常の

力があつた。

超能力。

数多のフィクションは言うに及ばず、テレビ番組でのスプーン曲げや透視、予知等の映像。更にはそれを研究する某国の国営機関の存在。

その全てが本物だった訳ではない。だが確かに本物がその中に存在していたのである。

フランスのＩＳ関連事業の最大手、デュノア社。世界シェア第三位を誇る量産型ＩＳ『ラファール・リヴァイブ』を主力商品に持つ軍需産業全体でも割と高い評価を受ける企業である。

そのデュノア社社長にはスキャンダラスな秘密がある。所謂隠し子である。

如何に大企業、それも治安に関わる企業とは言え、他人の恋愛事情。関わりのない人間はそうつとしておいてやってもいいだろうに、そんなことを好きなのも大衆というものだ。芸能人や政治家のと同等の関心を受ける人物になったということでもあるが。

そんな相手に子供が生まれていたと彼が知ったのは、相手の女性と会えなくなつてから数年してからだ。その女性の部下、のような仲間の一人が女性本人に了解を得ずに

勝手に伝えたものだった。

彼女は自立した女性だった。権力や地位に興味を示さず、スリルと財貨を愛する豪放な性格に、他の女性にはない魅力を感じたのだ。

男と女の関係になったのは、政治的な理由で現在の妻との婚約が決まる少し前の事であった。

彼女の仲間の一人、ミハイルという名の青年には殴られた。もう一人のガントというがつしりとした体格の男も、言葉こそはなかったがその視線に言いたいことが籠っていた。

だが彼女は、さっぱりとしたものだった。気持ちのいい笑顔で、それが当然だと言うように。そしてその日以来、彼女たちは彼の前に現れることなく、十数年が過ぎて行つた。

連絡を寄越したのはミハイルからだつた。互いに既に中年と呼ばれる歳になっていた。向うから連絡を取ってくることはないと思つていただけに。懐かしさに喜びが混ざつていた。

「それで、その子が私と……」

「はい、あんたと姉さんの娘ですよ」

再会の場所はとあるレストランの個室。そこそこ高価な食事が並べられたテーブルを挟んで、彼らは対面した。

不機嫌そうなミハイルと共にいたのはハニーブロンドの少女だった。可愛らしくも中性的で、中々の容姿と言えるだろう。気の強さが容貌にも出ていた彼女とは、その辺りなかつたようだ。

彼、デユノア社長はミハイルに嫌われていることに納得している。姉と慕った女性と寝た男が、無恥にも他の女性と一緒にあったのだ。それでも直接口にしていないのは女性本人がそれで善しとしているからだろう。

「そうか、私の子か……」

ぽつりと漏らした言葉に、ミハイルの眉間の皺が少し深まった。

対してデユノア社長は、嬉しいと言う感情を覚えると同時に困惑もしていた。何故今になって、と。

もし、彼女たちが生活に困窮して、援助が必要になれば喜んでしよう。だが、彼が

知っているあの女傑はそんなものに頼ろうと考える人間ではない。仮に、この日初めて出会った娘のためだとしても、彼女なら直接頭を下げてくる気がした。

「あ、あの、初めまして、お……父さ……ん」

おずおずと、ハニーブロンドの少女は絞り出すような声で挨拶をした。恐らく、彼女もデュノア社長と同じなのだろう。血が繋がっていないながら、初めて出会った二人。どう接すればいいのか、お互いに分からないのだ。

「そう、らしいな。いや、彼女の事で君たちが嘘を言う筈がないか。そうだな、君は間違いなく、私の子なのだな」

ミハイルとガントが、彼の女傑を貶めることなど有り得ないのだ。それを自覚すれば、戸惑いの感情は薄れ、目の前のハニーブロンドの少女が愛おしく感じてくる。

「私とマリエラの娘か、良ければ名前を教えてください？」

緊張で、娘の名前すら聞いていないことに、彼は漸く気付いた。

「……シャルロット、です」

「そうか、良く似合う名前だな」

未だ『親子の絆』と呼ぶには、余りにも儂くか細い繋がりが、今紡がれた。それをミハイルは面白くなさそうに見つめ、ガントはただ黙するだけだった。

親子の対面は然程長いものではなかった。四人で運ばれて来たダイナーを口にし、デュノア社長とシャルロットがぎこちない会話を、そしてそれを男二人が見守り続けた。

そして食事を終え、シャルットはガントに伴われ、近くに借りたというホテルに戻っていった。そして残ったミハイルはこう伝えた。

シャルロットを引き取ってやって欲しい、と。

シャルロットが母から離れ、会ったことのなかった父親の元に来たのには、なんとかしてもやり遂げたい目標があるからだ。

母のような超常の力を持たずに生まれたシャルロットは、金銭ではなく刺激の為に窃盗を繰り返すの身を危ぶんでいた。だが、娘と言えどマリエラの生き方を説得するには至らなかった。

それでも引下がらない娘に、マリエラは一つの条件を出した。

なら、お前が私を力づくで止めるんだ。

そんな一言が、シャルロットの未来を決定づけた。母親を止める為の力を得る為に、彼女は『家出』を決行。色々な所に頭を下げてでも、母と相對することのできる力を手に入れる為に。

「大体こんな感じかな、ボクの事情は」

シャルロットは、学園に男装の許可を申請した時と同じ内容を一夏に説明した。特に脚色もない、包み隠さない事実である。

「苦勞してるんだな、シャルル……じゃなくってシャルロットは」

それを聞いて、目尻に涙を浮かべる一夏。学園への説明の際、話を聞いていた千冬と同じ反応に、姉弟だな、と感じた。

「よし、そういうことなら、俺も協力する。手助けが必要なことが有ったら何でも言ってくれ」

「うん、そうさせてもらうね。もでもボクが頼るには一夏がもつと勉強しなきゃいけないと思うけど」

「おうふっ」

少し意地の悪いシャルロットの返しは、一夏にクリティカルした。

「でも、ありがとう。真剣に考えてくれて。何か有ったら頼りにさせてもらうね」

「おう」

二人は握手を交わす。お互いに屈託のない笑顔が無壁合いながら。

（そう、頼りにさせてもらおうよ。一夏の主人公体質をね）

女子にもて、わざとやってるのか疑いたくなる突発性難聴、そして女しか動かせない筈のI Sを男でありながら動かした特異性。まさにラノベ主人公そのものである。

付け加えるなら、ついさつき風呂場でシャルロットの裸を見ってしまうというラッキースケベもこなしている。女バレする以前は壁ドンっぽい状況もあった。最早主人公以外のなんだと言うのか。

一人専用機の中で基本スペックに劣る彼女の機体。新型の専用機と互角に戦うには萌えシチュエーションブーストは大きな武器になる。

（フッフッフ、これからもラッキースケベやラノベ主人公ムーブ、期待してるよ、一夏）

シャルロット・デュノア。目的の為に手段をあんまり選ばない、ちよつと腹黒属性持ちだった。